風の剥製・参

根岸一之

わが畏友古山正雄氏にこの句集を献ず

寺山修司はどこかで、俳句は滅びゆく文藝であるという意味のことを書いている。その文章は、なぜ寺山が一時的にではあるものの、俳句に熱中したかの弁明のような文章であった。しかし、それはともかく、その寺山一流の「滅びの美学」に魅せられて、すでにほぼ三十年が経過した。そして、俳句に深く関わるにしたがって、日本語という言語の戦慄すべき「魔術的」性能に気づかされたりもした。

ここら辺りで、数冊の私家版の句集に纏めておこうと思いついたのは、ごく最近のことである。現実世界に眼を移せば、当たり前に出版できたとしても、そのような「滅びゆく文藝」には、多数の読者を獲得出来る術もない。とすれば、何時か誰かが発掘するまでの数百年を、電脳の海に沈めておくべしと決意し、ここにそれを行うことにする。

アルカディアの記憶

序：断絶と残光

著者は「アルカディア」なる古代からの西欧的理想郷のフィクションを捨て、絶望の淵に降るかも知れない春の雪や、斬首の瞬間に真っ白な雪の上に咲く寒牡丹といった、いわば極限状態における壮絶な美あるいは常ならざる恩寵を凝視し続けているのかも知れない。ここに収録された俳句の形を取った七十二の断章は、時間による不可避な腐蝕に抗いながら最果ての場所に辿り着いた精神の記録である。そしてそれは、この書物の読者の内面にある根源的な記憶を呼び覚ます美しくも特異な「標本箱」のような役割を果たすのである。

読者はページを捲ることで、鏡の中を渡る鳥の影を追うように、現実から断絶された静謐な精神世界へと誘われることになる。

目次

さよならの象（かたち）——06
B面に猫——16
磨滅のイコン——26
デジタルの花言葉——36
青の沈殿——46
十秒間の萬愚節——56
鏡の影を鳥渡る——66
魂あそび——76

さよならの象（かたち）

海市消え一島描かれぬ古地圖かな

近松忌袂からまる影繪かな

紫陽花の黄昏を摘む指の先

黒南風や井戸の底なるベルメール

風琴の白鍵に触る涅槃西風（ねはんにし）

蟬丸忌さすらふ指や琵琶の墓

水無月や弔花を叩く雨の白

さよならの象（かたち）の白し杜若

いちめんの菜花畠やサティの死

B面に猫

雪螢ふはふはふはと一世限り（き）

海ゆかば螢一列そのなかに

九月盡錆びたる過去に鍵をかけ

祭日や豫報斬り裂く青嵐

空蟬や翅より腐蝕はじまりぬ

銀化する遅さで歩む蝸牛（くわぎう）かな

氷河期の痕跡なきや螢烏賊

B面のピアフのみ聴く啄木忌

春ですねアルカイックに猫笑ふ

磨滅のイコン

受難節踏繪のイコン磨滅せり

祝祭や海鼠殺して獨り酌む

凩や廃都の證（あかし）香るのみ

地面より千木（ちぎ）を仰ぎぬ建國日

猿澤の月や薄氷（うすらひ）割るる音

質量を持たざる巌（いは）や雪化粧

探梅や紙人形へさすルージュ

花一輪これを越ゆれば春一輪

最果ての原野の虚（うろ）の凍鶴よ

デジタルの花言葉

除夜の鐘デジタルの文字竝ぶかな

獨り居の五人囃子へ弓を引く

立ち昇る原始香るや柏餅

紫陽花や花言葉ごと雨へ棄つ

梔子（くちなし）の雌蘂に触るる薬指

死の淵の蟻へ眞晝の光かな

行夏や五分遅らす腕時計

法師蟬落ちて巡らす死後の景

あはれ秋風よ情あらば

生きめやも秋刀魚は今も苦きかな

青の沈殿

わが忌なり骨の髄まで冷ゆる月

龍膽（りんだう）の青そのままを疊みけり

銀木犀零れ芳香尽きにけり

秋深し翳に隠せしこの身かな

炎獄（れんごく）の底に居りしは去年の彼岸まで

水無月の雨羊水の温みあり

芒原ただ事ならぬ白さかな

水澄むや夜を沈めし底の青

蟻地獄召さるるまでの遊戯かな

石の耳、氷の目

萬愚節すべての窓にショパン鳴る

稲妻の響きわが身を石とせり

ギオロンの弦（いと）断ちてより冬の雷（らい）

線香花火十秒間を狂ひ咲く

冷奴突き崩さうか獨りきり

亡き人形（ひと）の膚（はだへ）を偲ぶ半夏生

隻眼の雛（ひひな）を愛づる祭かな

いまだ見ぬ夢の終焉（をはり）や姥櫻

薄氷（うすらひ）やわたしが私を射る夜明

鏡の影を鳥渡る

ミステリィ未完のままに沙羅の花

夏館（なつやかた）鏡一枚あるばかり

晝寝覚（ひるねざめ）狂へる畫家の耳に穴

昏れ泥（なづ）み空を蹴るかな夏少女

秋陽射すイタリア広場翳の塔

蝸牛　バベルの圖書館経巡りて

わが歩む花野徒花（あだはな）ばかりにて

聖壇に檸檬をひとつ遺(のこ)し去る

永遠（とは）を飛ぶ気球の影や鳥渡る

魂（たま）あそび

金木犀光の凝(こご)る街角に

闇を漕ぎ香りを辿る花見かな

月光を孕めば籠目かごの鳥

無花果やフランツ・カフカ婚約す

アルカディィアにゐたことはなし夕月夜

絶海の鳥もかよはぬ花野かな

断首さる無辜の牡丹の白に咲く

節分の鬼のいぬまの魂（たま）あそび

童らの花いちもんめ櫻死す